

この文章は著作者本人の許可を得て掲載してはいますが、著作権は著作者本人の許に存在します。**転載を禁じます。**

誤植等の可能性があります。研究論文等に引用される場合は、**初出紙掲載のものを参照してください。**

## 作品読解「夫婦善哉」（織田作之助）

三木輝雄

掲載 『国語と教育』 第一五号一九

九〇年三月二三日大阪教育大

学国語教育学会発行

テキスト

## 構成

この小説の構成を大まかに述べると次の通りになると考えられる。

まず場面設定の紹介ともいうべき蝶子一家の描写からこの小説は始まる。

年中借金取が出はいりした という書き出しから一家の家業である貧しい一銭天婦羅屋の描写、頼りない父親・種吉と一家の家計を切り回す母親・お辰の描写、そしてこの二人に対する批判的な視点を持つ人物として十歳歳の蝶子が登場する。

次に蝶子が小学校を卒業してから女中奉公、芸者となり、維康柳吉と出会うまでの描写をまじえた説明があり、そして柳吉の説明的な紹介と、二人の馴初めが述べられる。

ここまでがこの小説をスタートさせる為の舞台設定の紹介であるが、この後は蝶子・柳吉間の愛情のやりとりを軸とした二人の流転生活が最後まで描き続けられる。ここで特徴的なのは職業の変遷と金銭の羅列である。これらのものも二人の人生を運んでいく軸となつている訳で、二人の人生は愛情に関する軸と経済的な軸（この軸は後に、実は“自尊心”に関する軸であることがわかる。）の二つのレールによって運ばれていくのである。

ただし、この二人の人生にも途中で変化が起こる。即ち柳吉の実家との絶縁、蝶子のガス自殺未遂、柳吉の遁走と帰還によつて、先に挙げた二つの軸の内経済に関する軸（“自尊心”に関する軸）が消滅するのである。したがつて小説の構成としてはここで話が分かるかと考えられる。

これらのことから考えると「夫婦善哉」は起承転結に近い構成を取つてることがわかる。蝶子・柳吉の駆け落ちを起の部分に入れる。

るか承の部分に入れるか、また柳吉の実家との絶縁、蝶子の自殺未遂を転として取り立てるか、承の一部として含めてしまいかやや微妙ではあるが、小説の構成が起承転結の形に近いものになっていることは確かに言えるだろう。以下この構成に従ってプロットごとにその内容を読解していくことにする。

なお「夫婦善哉」の構成に関して青山光二氏の次のような意見もあるが、私はこれに対して疑問を呈しておく。

この二人（蝶子と柳吉）の人物の運命を心ゆくまで追及しようとする著者は、短編乃至中編的構成としての起承転結などは、ほとんど眼中にいない。

〔補註引用者〕

## 読解

### （一）種吉・お辰夫婦

(一錢天掃羅屋)

種吉一家が住んでいる家が江戸時代以来の長屋造りで、生活様式もほぼそれと同様であることが、家主や路地という言葉、或は掛売りの借金取りというものによってわかる。種吉はそこで一錢天掃羅屋を営んでいるのだが、一錢天掃羅とは惣菜にもなるが、駄菓子にもなるという全く庶民的な商品である。

(種吉)

種吉は、才覚を生かして出世するというタイプの大阪人ではない。彼はその逆でどこか頼りなく、すべての人に対して底抜けにお人好しで、働くことは好きだが欲はないといった人物である。大阪人のタイプの内、俗に言う“お人好し”の典型である。たとえば、頼りなさというのは、借金取りとの対応、十二歳の蝶子に批判的に見られる商売のしかた、

柳吉との初対面の挨拶などから読み取れる。またお人好しという性格だが、これはたとえば材料を分厚く使った商売のしかたや、「お前の好きなようにしたらええがな」という言葉に代表される子供への甘さ、後に柳吉夫婦が店を開く際の手伝いや、妻お辰が死ぬ際のモルヒネの扱いなどから読み取れる。

（お辰）

お辰はお人好しの種吉を支えて一家を切り回して行かねばならないだけに、世間の裏表、かけひきを心得て、欲を出して世を渡っていかなければならない。その為には借金取り相手に浅ましい芝居もする。一銭天婦羅の材料も節約する。蝶子に良い条件の女中奉公先が見つければ思いがけぬ血色も出る。また蝶子を良くしてもらう為には柳吉に白々しい芝居をしてもみるのである。また後に蝶子と所帯が分かれてからは種吉の無心を断った蝶子にどなり込んだり、同じく種吉の手伝いの申し

出が断られると恨みがましい口をきいたりするのである。しかし、これらは全て一家を支え、世を渡る必要に迫られたもので、彼女にもとからそなわっていた悪い性質というようなものではない。それが証拠に彼女が死ぬ間際、私に構わんと、はよ錐康さんとこい行つたりいな」そして、……中略……と、お辰は気持も仏様のようになっており、死期の近づいた人に見えた　　というように、彼女が一家を切り回す義務から解き放されると、もはや彼女には欲も得もなくなるのである。

ここで注意しておきたい事は、貧しい庶民の白々しい嘘（芝居）や浅ましい振るまいを見つめる作者の眼が、決してそれを批判するものではなく、それらの愚かしさ、いやらしさを貧しさに迫られた必要からと判断し、そこに庶民の哀れさ、生きることの悲しさを観ているということである。

「夫婦善哉」の中で種吉・お辰夫婦のもつ意味をまとめると、種吉によって表出された“お人好し”の滑稽さと、お辰によって表出された庶民の営みの哀れさの二つによって、作者は大阪の庶民像の一つの典型を作品の中に構成しているということが言えるだろう。さらにまた、この二人の姿を価値観がずれている或はチグハグな生き方をしているにもかかわらず、夫婦という一つのタガにはめられることによって二人で一つの世界を構成しつつ支え合って生きていく夫婦像を見ることが出来る。(そのように考えるとラストの場面での蝶子・柳吉夫婦の姿とよく似た関係にあるといえるだろう。)

## (二) 蝶子・柳吉夫婦

### (蝶子)

容姿は人から妾になれと再三言われる程であり、つまりは別嬪ということになる。頭

（脳）の方は十二歳の時に 母親を欺して買  
食いの金をせしめたり、 父親の算盤には炭  
代や醤油代がはいっていない ことを見抜い  
たるする程で、つまりは利口である。芸者に  
なる時 持前の陽気好きの気性が環境に染つ  
て是非に芸者になりたいと 駄々をこねたり、  
芸者になつてからも 陽気な座敷には無くて  
はかなわぬ妓であつたから、はっさい（お転  
婆）で売っていたのだ というように浅まし  
い程陽気なのである。また後に柳吉が浮気す  
る度に折檻するなど相当に気の強い性格であ  
る。この気の強さと重なることであるが、柳  
吉を無理矢理自分の人生のレールの上に乗せ  
て離さないという傲慢さもある。

（柳吉）

柳吉はもともと梅田新道にある理髪店向け  
化粧品卸問屋の旦那であり、中風の父親に  
代つて店を切り回していた。つまり彼は適所  
におれば、それなりのしっかり者であり、根

つからの頼りない男ではない。彼が頼りない行為をするのは自分のすることがない。つまり自己の存在感がない状況のせいである。もう少し言えば柳吉から自己の存在感というものを奪い取っている蝶子のせいである。たとえば彼の放蕩も、彼には遊び友達がいたという程でもともと遊び好きではあるが、それ以上自己の存在感が失われた状況に対して反発して自己の存在感を回復しようとする意味が彼の滅茶苦茶に羽目を外す遊び方にはある。また彼は卸問屋のぼんぼんとして育ってきたのであり、どんな仕事（店員や職工）にでも耐えて頑張るといふのは無理なことである。即ち柳吉と蝶子とでは自分の力を発揮できる適所というものが多少ずれているのである。この点を十分に押えないで柳吉と蝶子と比較して一方的に柳吉を頼りない男だと決めつけてしまうのはやや早計であろう。

また柳吉は腹の中では相当に計算高く、狡猾でもある。彼は常に蝶子と実家とを天秤に

かけ、いつでも蝶子を裏切る用意があったのである。ただそれが表面化しなかったのは蝶子の愛情の強さ（傲慢さ）と実家の状況の為である。

なお蝶子との関係には直接の関係はないが、小説の道具立てとして柳吉の食い意地、うまいもん屋を好むということが二つの意味で重要である。一つは「夫婦善哉」という小説が構成する作品世界としての大阪を表現する大切な道具立てであるということ。もう一つは、蝶子と柳吉の馴初め、或はラストでの仲直りなどプロットが転換する時に使われる重要な道具立てであるということである。このことと関係するのだが「夫婦善哉」という題名自体も重要な意味があるのは明らかである。このことについては後に詳しく述べる。

### （二人の関係）

#### 「起」

二人の馴初めであるが、これはこの小説を

起承転結の四つに分けた場合の起の部分の柳吉の紹介と重ねて書き始められる。三十一歳で妻子もあり、父親に代って店を切り回している柳吉を蝶子は律義者と見、しつかりした頼もしい男だ　と思っっている。また逢い初めて三月で自分の身上を全て明かしてしまいうような仲となり、評判も立った。しかし他の人々は、柳吉は蝶子が見る程には真面目でないと見抜いており、結局蝶子は柳吉のことを良い方へ良い方へと解釈する程、彼にのぼせていたのである。また蝶子は柳吉の商売に係のある品物に興味を示したり、柳吉の店の前を通る時彼の様子を観察したり、最後には柳吉の家へ手紙を出すなど芸者と旦那の関係を越えた恋愛感情を持っている。これに対して柳吉の方はあくまで芸者と旦那の間柄をわかきまえ、蝶子が店の前へ来てもできるだけ知らん顔をし、また手紙が来た時も　蝶子の出しゃ張り奴と肚の中で呟いている。そして二人の駈落ちにしても蝶子にとっては自分の

生活（身の振り方）に直接影響のあることで、これからの二人の行末のことを考えたら、そんな呑気な氣イでいてられへん　と本氣にならざるを得ない。一方柳吉は父親に勘当され、一旦は家を出なければ収りがつかないから飛び出したままで、蝶子を誘って駈落ちしたのは東京で集金した金で蝶子と遊ぶ（遠出する）つもりだったのである。即ち　勘当といっても直ぐ詫びを入れて帰り込む肚　だったのである。この駈落ちは後に二人が一緒に暮らすきっかけとなっているのだが、ここまでみてきたように柳吉は芸者遊びとして蝶子との仲を考えていたのに対して、蝶子は芸者と旦那の間柄を越えた恋愛感情を持ち、また駈落ちについても柳吉の意図（遊び）に反し、蝶子の方が本氣になってしまったのである。

では何故蝶子が柳吉に旦那として以上の恋愛感情を持つようになったのであろうか。柳吉は蝶子と親しくなると彼女をよく　うまい

もん屋（庶民的な料理のおいしい店）へ連れていったが、蝶子もしだいにそんな食べ歩きが楽しみになり、しんみり父親の油滲んだ手を思い出したりして、後に随いて廻っているうちに、だんだん情緒が出たのである。つまりこのうまいもん屋の食べ歩きによって蝶子は柳吉に旦那として以上の親近感、自分の最も懐しい部分を二人で共有しあえるという親近感を持ったのである。ここに柳吉を旦那であると意識する気持ち が薄れ、柳吉に対する愛情がそれを乗り越えて、彼をまるで自分のもののように考える意識（夫や親しい愛人に対するような占有意識）が生じたのである。

整理すれば、蝶子の柳吉に対する愛情の強さと、柳吉に対する懐しい親近感によって蝶子は柳吉の意図（遊びのつもり）を解することなく、どんどんと本気になっていったと言える。そして旦那と芸者という間柄を忘れてしまったのである。

次に駈落ち事件の後、二人が所帯を持つに至るあたりの二人の関係について考察してみたい。

駈落ちして熱海で遊んでいる時二人は関東大震災に会い、大阪へ戻ってくるが、大阪へ着くと二人はとりあえず蝶子の実家である種吉の家へ行く。柳吉にとってはきまりが悪く、落ちつかないが、一方蝶子の方はひと息つくところへ帰れまい。同じく家へ足踏み出来ぬ柳吉と一緒に苦労すると一方的に柳吉と一緒に暮らすことを決めてしまう。ここで注意しておかなければならないのは、家出したとは言え、柳吉には家（店）も、妻も子もある身であることを蝶子が考慮していないことである。これは父親の種吉も同様で、彼は蝶子の申し出を許し、蝶子の前借の返済の算段を始める。ここで柳吉も口をはさむが、種吉はそれのお人好しさの余りそれを振り切り、柳吉は自分の意志（実家への帰参）に関係なく蝶子

と一緒に暮らす話がしだいに固まっていくなをただ傍観する。これは彼の性格的な意味での頼りなさによるのではなく、自分の身の振り方を決めかねている状況の為であり、また事の成り行きを静観するという一種の計算高さを示しているとも考えられる。つまり柳吉が事の成り行きを静観している間に、二人の駈落ちを本気に考えていた蝶子が柳吉への愛情と親近感とによつて一方的に所帯を持つことにしてしまったのである。だからこそお辰に蝶子を育てた苦労話を持ち出され、これからよろしく頼むという内答の挨拶をされると柳吉は自分に蝶子のめんどろを見る責任を負わされた訳で、耳の痛い気がするのである。

二人が一緒になることが決まり、二階借りをする家を見つけてきたのは本文には書かれていないがおそらく蝶子ということになる。

黒門市場の中の路地裏の折箱職人の家という

のは地理的にも職業的にも上塩町に一銭天婦羅屋の実家を持つ蝶子の方により近い。

このように蝶子が家を見つけ、稼ぎも蝶子が稼ぐ、小遣いも蝶子が十分に出すという状況になれば、柳吉はただ毎日暇をつぶして遊んでいればよく、もともと好きな相手に養ってもらうわけで柳吉にとっては損な話ではない。また彼は蝶子をおばはんと呼び出すように蝶子の“つばめ”になった形で、彼女に甘えるのである。しかし、種吉の女房や子供捨てて二階ずまいせんならん言うのも、言や言うもんの、蝶子が悪いさかいや という言葉に対して蝶子が 私のお父つあん、良えところあるやる と言っても 柳吉は気のない返事で、何を考えているのか分からぬ顔をしていた というように柳吉は蝶子との生活が本格化することに気乗りしていないのである。これは彼の実家へ戻る肚づもりの為である。つまり柳吉は最終的には実家へ戻る肚を持ちながら蝶子との気楽な生活を楽しんで

いる間に、蝶子が二人の生活をどんどん本当の夫婦としてのそれへと固めて行っているのである。蝶子が二人の間柄をモはや夫婦のよ  
うに考えている証拠には くらい暇かかつて  
何してるのや という柳吉に対するぞんざいな口のきき方が挙げられよう。またその台詞の直後には こんな口を利いた と書かれて  
おり、蝶子の口の利き方が普通でないということが示されている。

このような夫婦気取りでいる蝶子に対して柳吉はやはり実家へ戻る肚づもりで、先に挙げた 何を考えているのか分からぬ顔をしていた と書かれたすぐあとに、彼が実家へ紋附を取りに行くと言って帰る場面が描かれている。また別の箇所には 何れ帰参がかなうかも知れぬという下心があつた と書かれている。このように柳吉は実家へ帰る意志をもつて、その年も暮に近づいた頃紋附を取りに行くことを口実に実家の様子を見に行くので

あるが、実家では妻は籍を抜いてその実家へ  
帰り、子供は柳吉の妹が母親代りに面倒見て  
おり、結局子供にも会えずに追い返されるの  
である。ここで柳吉は はつきり勘当だと分  
り、蝶子のもとにとまざるを得なくなる  
のであるつまり蝶子の“つばめ”になったつ  
もりで気楽な生活を楽しんでいた柳吉はもは  
や実家へ戻ることができなくなり、結局蝶子  
が設けていた夫婦生活の中に閉じ込められる  
ことになったのであり、彼も今はそれをはっ  
きりと意識させられてしまったのである。

一方、柳吉がはつきりと実家から追い出さ  
れたと知って、蝶子は

私の力で柳吉を一人前にしてみせま  
っさかい、心配しなはんたとひそかに柳  
吉の父親に向って呟く気持を持った。自  
身にも言い聴かせて「私わては何も前の奥さ  
んの後釜に坐るつもりやあらへん、維康  
を一人前の男に出世させたら本望や」そ

う思うことは涙をそそる快感だった。

というように、彼女は柳吉が好きで一緒に  
いたいだけでなく、柳吉を自分のものとし、  
自分の手によって新たに一人前の人物に押し  
上げることによって、柳吉・蝶子というりっ  
ぱな即ち確固とした存在感を持つ夫婦世界を  
築き上げようとする願望をこの事件によって  
はつきりと持つようになった。そしてそこに  
は無自覚なものではあるが、自己の努力によ  
って人生の上に成功を築き、それによって“  
自己の存在感”を獲得しようとする心理、つ  
まり“自己存在の確立”への希求が読みとれ  
るのである。したがって蝶子が以後柳吉に尽  
くす献身は柳吉の為に尽くす形をとりながら、  
蝶子の欲望（“自己存在確立の希求”）を満  
たす為という一面を持ち、蝶子は柳吉を自己  
の欲望の中に巻き込んでいったとも言えよう。

このことを柳吉の側からみれば、柳吉は確か  
に蝶子の献身によって生存を支えられ、徐々

に出世もできるのであるが、それと引き換えにもとの卸問屋の旦那としての身分（本来の“自己の存在”）を失い、結局柳吉にとって是有難迷惑の形となっているのである。このことは河<sub>2</sub>盛好藏氏も彼女（蝶子）は柳吉によりかかって生きているようで、実は柳吉を食って肥っている（補註引用者）というように指摘している。今も述べたように蝶子に養ってもらうことは柳吉にとって気楽な反面、自己の存在感を奪われることであり、それ故彼のもともとの存在である卸問屋の旦那という身分を保障してくれる実家への復帰を彼はあきらめきれないのである。

「承」

この後、承の部分では蝶子の柳吉を出世させる為（二人でりっぱな夫婦となる為）の努力（献身）とそれに反発する柳吉の放蕩、実家へ復帰する為のそれとの交渉、また柳吉の放蕩に対する蝶子の折檻が様々な商売の変遷

の上に繰り返されるが、以後それらについて考察していく。

まず二人が所帯を持つと蝶子がヤトナ（出張芸者）をして稼いだが、先にも挙げたように柳吉は絞附を取りに実家へ行って、そこではつきり勘当だと分り、しばらくしよげかえっていたある日、昔の友達に会い、それがきつかけとなつて蝶子の貯金を全部使い果すまで放蕩する。これは柳吉の実家に対するヤケであると共に自分を不本意な境遇に引き込んだ蝶子への反発である。これに対して蝶子は柳吉を折檻するが、これは自分の貯金を使い果された、つまり二人が出世する為の自分の努力をくじかれたことへの怒りである。ただこの怒りは柳吉への愛情の前にすぐとけてしまうのである。

次に柳吉は剃刀屋の店員として就職したり、二年後には蝶子のヤトナの稼ぎによつて自分で小さな剃刀屋を持ったりするが、どちらもその所在なさ（“自己の存在感”のなさ）の

為に長続きしない。そして柳吉はその“存在感”のなさを慰めるためにしばしば安カフェへ通って遊ぶのである。柳吉がちびちびカフェへ通うことに関しては蝶子も柳吉の気持ちを考えて自分の気持ちを抑えるのである。

剃刀屋をたたんで三年後、蝶子のヤトナの稼ぎによって再び貯金がたまった時、柳吉の実家が髻養子を取り、それに跡をとらせることになった。柳吉は自分の復帰すべき座を失う、即ち自分の“存在”を回復する大きな可能性を失うことになり、そのヤケの為再び花街で散財する。これに対して蝶子は 妹が髻養子を迎えると聴いたくらいでやけになる柳吉が、腹立たしいというより、むしろ可哀想で、蝶子の折檻は痴情めいた（傍点引用者）というような折檻のしかたをする。これは柳吉に対する激しい愛情が逆説的な行動（表現）として表れたものである。

蝶子にとことん折檻された柳吉はその内にかを家を出て何日も帰って来ないのであるが、こ

れは柳吉が蝶子と別れるつもりで家を出たのであって、そのことは種吉や八卦見の言葉によつて表されている。やがて柳吉は蝶子のもとへ帰つてきて、実家から金を取る為に二人が別れたという芝居をしようと蝶子にもちかける。この柳吉の行動はおきんという人物によつて説明されるが、柳吉は実家へ帰るか或は実家から金を取るかどちらにしても蝶子と別れるつもりなのである。即ち柳吉は蝶子によつて巻き込まれ、縛りつけられている世界、自分にとっては生甲斐（“存在感”）のない世界から抜け出すために、実家の贍養子取りと蝶子の折檻をきっかけとして彼女と別れる計画を立てたのである。しかし、この計画はおきんの示唆、及び蝶子の愛情と直感によつて失敗に終るのである。計画が失敗すると、柳吉は実家への復帰もかなわず、金も取れず自分一人で自立したことのない彼は結局蝶子のもとへ戻ってくるしかしかたがなく、そしらぬ様子で再び戻ってくるのである。

この後柳吉は自分を追い出した実家に対する反発から関東煮屋を始めることになるのだが、これは実家に復帰することによって“自己の存在”を回復することが不可能であるとわかった今、自分の力で成功（出世）をしてそのことによって“自己の存在”を示そうとする彼の实家への反発である。と同時に彼の自分の力で“自己の存在”を確立しようとする試みでもある。

しかし、それも妹の婚礼に出席を撥ねつけられたことによつて柳吉は氣を腐らせ、むかしの“自己の存在”（卸問屋の旦那としての自己）を喪失してしまつたという絶望感を慰める為に再び放蕩し、その後も度々放蕩を繰り返す。一方蝶子は柳吉が自分との生活を後悔する気持ちを彼のかたる浄瑠璃の中に知り、自分が柳吉の不幸の原因になっていることを悟るのだが、彼女はそれによつて反省するどころか、かえつて折檻によつて自分の激しい愛情を柳吉にぶつけていくのである。

彼女にとってこれらの折檻は柳吉に対する自分の愛情の逆説的表現であり、哀願なのである。

やがて関東煮屋もやめ、柳吉が腑抜けた状態になっている時蝶子は果物屋を始めることを提案するが、柳吉はいよいよ食うに困れば、梅田へ行って無心すれば良しと考えており、乗り気にならない。しかし彼が梅田へ行って贅養子に無心を断られて追い返されると、再びそのような実家に反発するつもりですすんで果物屋を始める。この意味は先の関東煮屋を始めた時と同様である。この果物屋も長続きはしないのであるが、今度は柳吉の放蕩ではなく病気の為にある。

ここまでみてきて明らかになったことは、蝶子の二人で出世することによってりっぱな夫婦になろうとする願望に巻き込まれて、“自己の存在感”を奪われていた柳吉は、そのような蝶子に反発する意味で放蕩し、また自分の家や子供恋しさもあつて実家へ復帰しよ

うと努力するのであるが、蝶子の強い愛情や実家の状況（贅養子）によってしだいに実家とのキヨリが開き、もはやもとの旦那の地位に戻ることは不可能になった。そこで自分も蝶子との世界において“自己の存在”を確立すべく努力するのであるが、実家によって象徴される過去の“自己の存在”を忘れきることができずに努力が長続きしないのである。そして柳吉は腎臓結核の為に入院、手術ということになる。

小説は柳吉の入院、手術、養生、その間のお辰の死という蝶子・柳吉の二人にとっての最大の危機から急転回し、もう一度商売（カフィー）を始め、成功するという場面にさしかかり、承の最後として、また転への過渡として最大の振幅を示すのである。初めにこの部分の小説の構成における意義を考察し、後にこれらの場面のできごとの蝶子にとっての意義を考察する。

これまで蝶子は柳吉を一人前に出世させる  
為に様々な商売を始めてはほどなく失敗する  
ことを繰返してきたが、柳吉が腎臓結核で入  
院、手術ということになり果物屋の店も手放  
し、ヤトナにも出たが、金銭的困窮は極まり、  
蝶子はついに柳吉の実家に無心しに行くこと  
になる。私の力で柳吉を一人前にしてみせ  
まっさかい、心配しなはなんとひそかに柳吉  
の父親に向かって呟く気持　で今まで様々に  
努力してきた蝶子が、その“自己存在”を顕  
示すべき相手であつた柳吉の実家に泣き込む  
ということは、その困窮が最後の段階にまで  
達していることを意味するであろう。即ち蝶  
子は金銭的に最大の危機を迎えているのであ  
る。この危機は贍養子には無心を断られが、  
柳吉の妹に見舞金をもらうことと、種吉の見  
舞金（お辰の保険金の一部）とによって切り  
抜ける。

また柳吉の手術直後にお辰が死ぬ。この時  
危篤の知らせがあつても柳吉は　親が大事か

わいが大事か　　と言つて蝶子に歸らせなかつた。これは柳吉にとっては実家という自分を保護してくれるものを失つたところで大病を患い、今はただ蝶子のみが自分の生存を支えてくれるものであるという考えからくる不安の為であるが、その裏には自分を今の境遇に引き込んだのは蝶子であるという恨みがましい思いもあるのであろう。これに対し蝶子はいよいよお辰が死んで、お通夜をすませた後、柳吉の冷酷な態度と闘う内に柳吉の妹にもらつた金を母親の葬式に当てようと決心する。即ち　親が大事か、わいが大事か　と言つた柳吉に対して、その冷酷さ故に彼を裏切つて親をとるのである。今まで柳吉を全面的に愛し、離れようとする柳吉を強引に自分の世界に引き込んできた蝶子であつた（この事件の後も同様）のだが、ここで一度だけ彼を裏切る心を持つのである。即ちここで蝶子は柳吉との（愛情）生活において最大の危機を迎えているのである。しかしこの危機も柳吉の瘦

せた顔を見て決心がゆらいだこと（愛情）と金銭状態の好転によつてすぐに切り抜ける。

つまり柳吉の入院、手術は今まで柳吉を愛し続けて生きてきた蝶子にとつて、また蝶子の甲斐性によつて“生存”を支えられてきた柳吉にとつて、一時的にしる今までにない最大の危機的状態であつたのである。

このような危機は偶然の出来事（蝶子の旧友からの援助）によつて急転直下好転し、蝶子・柳吉の世界に今までになかつた最高の状態をもたらすのである。つまり、蝶子の旧友の援助によつて二人は思い通りの店（カフェー）を経営し、蝶子はもちろん柳吉もマスターとして十分に存在感を持つことができるのである。しかも柳吉の放蕩も今までのやけや反発的なものでなく、新しい仲間との愉快なものとなる。しかし蝶子の折檻は相変わらず続く。これは嫉妬の為であり、結局は柳吉に対する激しい愛情の表現なのである。このように承の終りの部分に至つて小説は、蝶子の設

けた世界において最大の危機の後に、最良の状態を構成して転へとつながるのである。

さてこの場面の蝶子にとっての意義である。

柳吉の入院によつて金銭的な困窮を極めた時、まず援助してくれたのが柳吉の妹であり、彼女は蝶子に金を渡す際 姉はんの苦勞はお父さんもこの頃よう知つたはりませ。よう尽してくれる、こない言つたはります (傍点引用者) という。これはあとでべんちゃらだと解るが、これに対して 蝶子は本真のことと思ひたかつた。柳吉の父親に分つてもらふまでに十年掛つたのだ。姉さんと言われたことも嬉しかった。 というように彼女はここで“自己の存在”が認められた喜びを一旦味うのである。だからこそこの後の柳吉との愛情における危機を乗り越えた時、蝶子は自分は大阪でヤトナをしながら、その稼ぎで離れたくないはずの柳吉を湯崎まで出養生に出すのである。ここに柳吉の父親に認められるこ

とによって“自己の存在”を確立しようとする蝶子の気持ち働いているのは明らかである。

しかし、この蝶子の“自己存在”の確立への努力も柳吉の湯崎温泉での放蕩によって再びくじかれる。今度の柳吉の放蕩もやはり何かにつけて蝶子は自分の甲斐性の上にどっかり腰を据えると、柳吉はわが身に甲斐性がなただけに、その点がほとほと虫好かなかったのだ。という蝶子への反発であったのだが、蝶子にとってはそれだけの意味ではない。柳吉が放蕩に使った金は妹にたびたび無心していたものであり、また自分の娘をひそかに湯崎へ呼び寄せて名所見物などさせていたのである。このことによって蝶子が柳吉の父親に認めてもらうことで“自己の存在”を確立しようとした努力が水の泡になったのである。ここで注意しておきたいのは聶養子に復帰するべき座を奪われながら柳吉はまだ実家とながっている。即ちまだ完全には蝶子の設け

た世界に納まりきっていないということである。しかし彼は その（蝶子の）甲斐性を散々利用してきた手前、柳吉には面と向っては言いかえす言葉はなかった。（補註引用者）  
というように結局は蝶子の世界に戻らざるを得ないのである。

このように出養生の場面において“自己の存在”を顕示することに失敗した蝶子であったが、彼女はそれにもくじけず こんど二階借りをやめて一戸構え、ちゃんとした商売をするようになれば、柳吉の父親もえらい女だと褒めてくれ、天下晴れての夫婦めおとになれるだろうとはげみ出した。（傍点引用者）というように再び、柳吉・蝶子の二人が出世して認めてもらうことによって自分（達）の“存在”を確立しようと努力しはじめるのである。そして偶然に再会した蝶子の旧友の援助によって二人は思い通りの店（カフェー）を経営するようになる。あとは父親に認められ、柳吉の娘をひきとれば天下晴れ

ての夫婦めおととなり蝶子・柳吉夫婦としての蝶子の“存在”は確固として確立されるのである。このように蝶子の“自己存在”の確立がほぼ完成しかけたところで転の部分へと移る。

### 「転」

転の部分とは蝶子のガス自殺未遂事件である。カフエーの経営がうまくいつているある日、柳吉の娘が柳吉の父の危篤を知らせに来た。実家へ急ぐ柳吉に蝶子は 父親の息のある間に、枕元で晴れて夫婦になれるよう、頼んでくれ と言う。つまり蝶子にとっては自分達の出世を認めてもらう（そのことによつて“自己の存在”は確立される）最後のチャンスなのである。が、結果は認められななかつたどころか葬式にも出てはいけないと言われる。蝶子にとって葬式に出ていけないと言われることは柳吉の妻として正式には認められていない。つまり柳吉と所帯を持ってから出世して認められることによつて本当の夫婦

になろうとしてきた全ての努力が踏みにじられた訳である。そして柳吉と本当の夫婦になることによつて確立されるはずであつた蝶子の“自己存在”はその努力とともに全て崩壊してしまつたのである。そして蝶子はガス自殺をはかる。

柳吉は蝶子がつくつておいた絞附をとりに戻つてきて蝶子のガス自殺を発見し、一命はとりとめるのであるが、彼はそのまま遁走し、やがて種吉宛に次のような手紙を送る。つまり自分は蝶子と別れて自活し、娘をひき取つて余生を暮したいという内容である。今まで散々利用してきた蝶子に自殺までさせてしまつてはもはや彼女のもとにも帰れず、かといつて父親が死んで身代が完全に養子のもつた実家に戻れるはずもなく、結局柳吉はその両方の世界に決別することを決心するのである。

このように転における柳吉の父の死と蝶子のガス自殺未遂事件によつて今までの二人

の生活は一度ははつきりと断ち切られるのである。そして結へと移る。

## 「結」

転の部分の事件によつて一度は断ち切られた二人の生活ではあるが、それは再び今までと同様な形で再開される。ただしこの結における二人の世界は転以前のそれとは質を異にする。

まず二人の生活の再開の過程であるが、蝶子は自殺未遂後、起きられるようになるのもなかつたかのように再び柳吉の戻ってくることを切望する。これは以前聳養子騒ぎの際に柳吉が遁走した時と全く変わらない。それは蝶子の柳吉に対する激しい愛情の不変を意味しているのである。一方柳吉の方は自活を決意したもののやはり無理だつたと見えて、別れの手紙を出したことなど何喰わぬ顔で戻ってくる。これは実家を失つた柳吉にとって“生存”を保てる世界は今や蝶子との世界以外

になくなつたことを意味する。

さてこのように以前までと同じような形で再開された二人の世界であるが、ここで以前と最も異質なのは蝶子の意識である。以前は柳吉とともに出世して、柳吉の父にも認められよう、そしてそのことによつて“自己の存在”を確立しようとしていた蝶子であるが、今はそれを捨てて、柳吉への純粋な愛情のみになつてゐる。つまり出世することへの願望がふつ切れて、何か悟りを開いた様子を示しているのである。二人が再会して　めをとぜんざい　を食べに行つた場面で蝶子は　一人より女夫の方が良えいうこととでしやる　と言う。ここには明らかに柳吉と一緒にいれさえすればそれで良いという気持ちが込められてゐると考えられる。この記述と　蝶子と柳吉はやがて浄瑠璃に凝り出した　という記述を考え合わせるならば、蝶子には出世への欲はすでになく、柳吉を純粋に愛する、つまり柳吉を自己の願望の実現の為の道具とせず柳

吉の良いように尽くすという彼女の姿勢をうかがうことができる。何故なら浄瑠璃はもとから柳吉の好きな趣味であり、出世とは何の関係もない道楽だからである。

このように蝶子の愛情の質が変わったことは確かだが、再会後の二人の関係の形はどうだろうか。先に挙げた蝶子の台詞の後にある「ぼんと襟を突き上げると肩が大きく揺れた。蝶子はめつきり肥えて、その座蒲団が尻にかくされるくらいであった。という記述や、二人が素義大会で二等賞を貰って景品の大きな座蒲団は蝶子が毎日使った。という記述は柳吉が以後も蝶子によって尻にひかれたということの暗示的な表現である。つまり形としてはやはり今までの二人の関係と同じく柳吉が蝶子の尻にひかれる形でその“生存”を支えてもらうということになっているのである。

これらの考察から、この結の部分において蝶子・柳吉夫婦の世界はその形は今までと変

らないものの、質が変化したことがわかった。その質の変化をもう一度まとめおく、と次のように言えるだろう。

蝶子は柳吉と一緒にになって以来、柳吉への愛情と柳吉を出世させ二人でりっぱな夫婦になろうとする“自己存在”確立への願望（織田作之助の言葉を借りれば“自尊心”）の二つに突き動かされて生きて来た。一方柳吉は自己の“生存”を保つ為に蝶子に依存しつつも卸問屋の旦那としての“自己の存在”をあきらめきれず蝶子に反発したりするという二つの心の上に立って揺れ動いてきた。しかし転の部分の出来事（柳吉の父の死、蝶子の自殺未遂）によつて蝶子は出世へのこだわりを捨て、柳吉も実家への復帰をあきらめざるを得なくなつたが、これは両者がそれぞれの“自己存在”に関わる心を捨てたことになる。そしてふり返つて考えてみると、蝶子においても柳吉においてもこの“自己存在”に関わる心が二人の間に溝をつくり、危機を生み出

す原因になっていたのである。従つて承の部分では別れそうになりながらまたよりを戻したりしていた二人が、転の出来事を経験することによつて二人の間の危機の原因を捨て、結では仲むつまじい夫婦になると考えられる。

しかし蝶子・柳吉の夫婦は全く問題なくむつまじく結ばれているだろうか。この事に関して宇野浩二氏も 作者の心 それから、蝶子の気もち は、『めでたしめでたし』どころか、やはり、孤獨であり、切なきものであり、哀愁きはまりなきものである。と指摘している。このような読後感を生み出すのは、結の部分で成立した二人の夫婦像を支える両者の心にズレがあるためであろう。つまり蝶子は柳吉への純粋な愛情を持っているのだが、一方柳吉の方は愛情ではなく自己の“生存”を支える為の蝶子への依存心を持っているにすぎず、この二つの心の上に二人の夫婦関係が成立している。表面上は仲むつまじく見えながら、その実二人の心が微妙にズレ

ているところに、切なさや哀愁といった読後感が生まれるのであろう。従ってこの小説全体をふり返った時、読者は最後に二人が結局別れずに末長く仲むつまじく暮らしていくということによつてほつとした安堵感を得ると共に、一方二人の心のズレに何かもの哀しさを感じるであらう。いわば泣き笑いの感覚といえるかも知れない。そしてこの相矛盾する二つの感覚の共存がこの小説のもつ叙情性の本質かも知れない。

### 構造と主題

ところでこの小説の中で右のように二人の気持ちはずれたまま夫婦として結ばれているのは蝶子と柳吉だけであらうか。種吉・お辰の夫婦もそうではなかったか。お人好しで欲がなく生活を度外視した種吉と生活の為に浅ましい欲を發揮して生きるお辰の二人もいわばチグハグな結びつき方をしていたと言える

であろう。つまりこの小説には二組の夫婦が描かれており、しかもその両方ともが何らかの意味でチグハグな形で結びつきながらも夫婦関係を持続させているのである。そして注目すべきはこの小説の最後の叙述である。つまり景品の大きな座蒲団は蝶子が毎日使った。(傍点引用者)とあり、結の部分で成立した蝶子・柳吉の夫婦関係が永続していくことが暗示されている。ここからは推量の域に入るが次のように考えることができ。様々な波乱の末に心或は意識のズレを内包しながらも安定して結びついた蝶子・柳吉のような夫婦関係はそのまま長く続いていき、やがて種吉・お辰の夫婦のようにズレながらも安定したまま添いとげる、というように最後の叙述によって二組の夫婦は循環的につながると思われる。そのように考えると、この小説では男と女とが結びつく初めは互いの心のズレの為に波乱が生まれるが、その波乱を乗り越えていく内に二人の心はズレな

がらもある一定の折り合いをつけて安定していくという一つの夫婦の姿が描かれており、そしてそれがあある世代から次の世代へと繰り返されていくという循環構造で描かれていることによつて、人間というものはそのような不合理な営みを「淀の水車」の如く延々と続けていくものだという人間観（夫婦観）が描かれていたとまで考えることができるかもしれない。これと同様の指摘を前田愛氏もしている。

ここ（上司小剣の『鱧の皮』（大正3））

で人間は、食べものを食べて死んでいく存在という、一番単純化した形で捉えられていて、その繰り返しがいわば人間の世界だ、という見方になっているんですね。

織田作の『夫婦善哉』は昭和の作品ですから『鱧の皮』よりもずっと感觸は新しいんだけれども、その一番底に流れ

ている人間観は、『鱧の皮』の一節と非常によく似ている。これは上司小剣、あるいは織田作という作家の個性を超えて大阪の人たちの一番基本的な人間の把まえ方だと患います。「補註引用者」

さて、作者は蝶子・柳吉のような夫婦像、ひいては右に述べたような夫婦観をどのような気持ちでとらえているか。それは「夫婦善哉」という題名と小説の最後の場面とから読みとることができ。

最後の場面で二人が行くぜんざい屋の名前はひらがなで「めをとぜんざい」であると書かれている。しかし題名には「夫婦善哉」という漢字があてられている。この間の差異は何を意味するのか。まず「めをとぜんざい屋」の描写であるが、そこは「しみじみと夫婦で行く店らしかった。おまけに、ぜんざいを注文すると、女夫めおとの意味で一人に二杯ずつ持つて来た。（傍点引用者）」というようにそこ

は夫婦で行くのに余りにもふさわしい店であったのである。そして おまけに という表現に作者がこの夫婦にあまりにも似つかわしい情緒を意図的に表現していることがわかる。

(なお明治時代の大阪では夫婦ふうふうという言葉はあまり使わず、ほとんどすべて「女夫(めおと)」「ミョオト」であった<sup>5</sup>という。)そして二人が食べるぜんざいについての柳吉の解説の中では 善哉ぜんさい と表記されており、二人ぜんざいを食へることが単にぜんざいを食べるだけの意味ではなく、表題に込められた作者の意図を担っていることは明らかである。そして蝶子はこの善哉を食べながら 一人より夫婦(初<sup>6</sup>。版本では「女夫」)の方が良えいうこととでっしゃろ と柳吉に対して二人の関係を承認させるのである。

ここで 夫婦善哉 という言葉について説明すると、これを漢文風に書き下すと「夫婦、善きかな(や)」となり、「夫婦(女夫)」というものは善いものだ。」或は「夫婦(女夫)

であるということとは善いことであるよ。」と  
いう意味のほめ言葉となる。織田作之助が当  
時「善哉」という語を「ヨキヤ」或は「ヨキ  
カナ」と読んで使っていた事は石濱恒夫氏の  
『大阪詩情<sup>7</sup>』の中に明らかである。このよう  
なことから蝶子の発言によつて結ばれた蝶子  
・柳吉の関係を、「夫婦善哉」という表現に  
よつて作者自らも「これで良し」と認めてい  
ると考えられるのである。即ちここに夫婦と  
いうものは互いにズレた心を持って結びつき、  
その為に波乱が起きてもあきらめ（妥協）に  
よつて波乱を乗り越え、心のズレを内包しつ  
つも安定していくものであり、そんな不合理  
な姿であつても一人孤独でいるより二人で支  
え合つて生きている方がよいという作者の思  
いが読みとれるのである。

### 初期作品群としての位置付け

#### 自尊心の問題を軸として

ここで蝶子の“自尊心”（出世欲）を軸として「夫婦善哉」を初期作品群に位置づけてみる。

蝶子は柳吉への激しい愛情とそれの単刀直入的な発現によつて柳吉を我がものとし、彼の心を慮ることなく自己の願望の為に彼をひきずつていく。そしてそこには蝶子が自覚しているわけではないが、“自己の存在（感）”を人生の上における成功によつて確立しようとする心の働きが読み取れる。即ち蝶子は“自己の存在（感）”確立の為に、蝶子・柳吉夫婦という一つの“存在”をひとかどのものに築き上げようとして悪戦苦闘していたと言える。そして織由作之助の初期作品に共通するパターンである成功しかけては失敗する、即ち“自己存在”を確立しかけては崩壊するというパターンがこの作品にも明らかに表れている。「雨」や「二十歳」「青春の逆説」などで使われている織田自身の言葉を借りれば、蝶子のこの行動もやはり“自尊心”に突き動

かされた行動なのである。（“自尊心”とは  
“自己存在”を希求する心理なのである。）  
そしてこのような“自己存在”の確立を求  
めて悪戦苦闘を続けてきた末に、やがて蝶子  
はそのような生き方の空しさを思い知り、そ  
れまでの願望を捨て去り、柳吉とよって心  
（魂）の安らぎを得ることのできる家庭的小  
平和世界としての“身内世界”を構成するこ  
とになったのである。即ち「夫婦善哉」にも  
“自尊心”に突き動かされる世界（自己の内  
部において絶対的な自我を確立することによ  
ってアイデンティティ<sup>9</sup>人<sup>9</sup>格的同一性を獲得  
しようとする世界）から“身内世界”（自己  
の出来の源である集団に帰属することによつ  
てアイデンティティ<sup>9</sup>歴<sup>9</sup>史的連続性が得られ  
る世界）への移行が描かれていたと言えるの  
である。

## 註

- 和五十一年発行)の「作品解題」(「夫婦善哉」)
- 2 『現代日本文学全集81 永井龍男・井上友一郎・織田作之助集』(筑摩書房)昭和四十一年発行の「解説」
- 3 「哀傷と孤獨の文学」宇野浩二『現代日本文学全集81』(2に同じ)所収
- 4 『名作のなかの女たち』(対談紀行)瀬戸内晴美・前田愛 角川書店刊 昭和五十九年十月三十一日発行(初版)二六八〜二九六頁
- 5 『大阪ことは事典』牧村史陽 講談社刊 昭和五十四年七月十五日発行(第一刷) 六九〇頁

- 6 『夫婦善哉』織田作之助 創元社刊 昭和十五年八月十五日発行 六七頁

- 7 『大阪詩情 住吉日記・ミナミ わが街』石濱恒夫 朋興社刊 昭和五十八年八月五日発行 二四七頁

- 8 『国語と教育』第12号 大阪教育大学国語教育学会刊 昭和六十一年三月三十一日発行  
「作品読解『雨』(織田作之助)」三木輝雄

参照

9 岩波新書『術語集 気になることば』中村

雄二郎 一九八五年七月二十五日発行（第十

刷）一頁

---

三木輝雄氏は大阪府立和泉鳥取高等学校教諭です。